
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ
(例) 毯《たん》

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号
(例) 或 | 夜《よ》である。

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定
(例) [# 地から1字上げ] (大正十一年十二月)

わたしは年少のW君と、旧友のMに案内されながら、久しぶりに先生の書斎へはひつた。
書斎は此処へ建て直つた後、すっかり日当りが悪くなつた。それから支那の五羽鶴の毯《たん》も何時の間にか大分色がさめた。最後にもとの茶の間との境、更紗の唐紙のあつた所も、今は先生の写真のある仏壇に形を変へてゐた。
しかしその外は不相変である。洋書のつまつた書棚もある。「無絃琴」の額もある。先生が毎日原稿を書いた、小さい紫檀の机もある。瓦斯煖炉もある。屏風もある。縁の外には芭蕉もある。芭蕉の軒を払つた葉うらに、大きい花さへ腐らせてゐる。銅印《どういん》もある。瀬戸《せと》の火鉢もある。天井《てんじやう》には鼠の食ひ破つた穴も、.....
わたしは天井を見上げながら、独り言《ごと》のやうにかう云つた。
「天井は張り換へなかつたのかな。」
「張り換へたんだがね。鼠のやつにはかなはないよ。」
Mは元気さうに笑つてゐた。
十一月の或 | 夜《よ》である。この書斎に客が三人あつた。客の一人《ひとり》はO君である。O君は綿抜瓢一郎《わたぬきへういちらう》と云ふ筆名のある大学生であつた。あとの二人《ふたり》も大学生である。しかしこれはO君が今夜先生に紹介したのである。その一人は袴をはき、他の一人は制服を着てゐる。先生はこの三人の客にこんなことを話してゐた。「自分はまだ生涯に三度《さんど》しか万歳を唱へたことはない。最初は、.....二度目は、.....三度目は、.....」制服を着た大学生は膝の辺《あた》りの寒い為に、始終ぶるぶる震へてゐた。
それが当時のわたしだつた。もう一人の大学生、袴をはいたのはKである。Kは或事件の為に、先生の歿後来ないやうになつた。同時に又旧友のMとも絶交の形になつてしまつた。これは世間も周知のことであらう。
又十月の或夜である。わたしはひとりこの書斎に、先生と膝をつき合せてゐた。話題はわたしの身の上だつた。文を売つて口を飼《こ》するのも好《よ》い。しかし買ふ方は商売である。それを一々注文通り、引き受けてゐてはたまるものではない。貧の為ならば兎《と》に角《かく》も、慎《つつし》むべきものは濫作である。先生はそんな話をした後《のち》、「君はまだ年が若いから、さう云ふ危険などは考へてゐまい。それを僕が君の代りに考へて見るとすればだね」と云つた。わたしは今でもその時の先生の微笑を覚えてゐる。いや、暗い軒先の芭蕉《ばせう》の戦《そよ》ぎも覚えてゐる。しかし先生の訓戒には忠だつたと云ひ切る自信を持たない。
更に又十二月の或夜である。わたしはやはりこの書斎に瓦斯《ガス》煖炉の火を守つてゐた。わたしと一しよに坐つてゐたのは先生の奥さんとMとである。先生はもう物故《ぶつこ》してゐた。Mとわたしとは奥さんにいろいろ先生の話聞いた。先生はあの小さい机に原稿のペンを動かしながら、床板《ゆかいた》を洩れる風の為に悩まされたと云ふことである。しかし先生は傲語《がうご》してゐた。「京都《きやうと》あたりの茶人の家と比《くら》べて見給へ。天井《てんじやう》は穴だらけになつてゐるが、兎《と》に角《かく》僕の手書斎は雄大だからね。」穴は今でも明いた儘である。先生の歿後七年の今でも.....
その時若いW君の言葉はわたしの追憶を打ち破つた。
「和本は虫が食ひはしませんか？」
「食ひますよ。そいつにも弱つてゐるんです。」
Mは高い書棚の前へW君を案内した。

三十分の後《のち》、わたしは埃《ほこり》風に吹かれながら、W君と町を歩いてみた。
「あの書齋は冬は寒かつたでせうね。」
W君は太い杖を振り振り、かうわたしに話しかけた。同時にわたしは心の中にありありと其処《そこ》を思ひ浮べた。あの蕭条《せうでう》とした先生の書齋を。
「寒かつたらう。」
わたしは何か興奮の湧き上つて来るのを意識した。が、何分かの沈黙の後《のち》、W君は又話しかけた。
「あの末次平蔵《すゑつぐへいざう》ですね、異国御朱印帳《いこくごしゅいんちやう》を検《しら》べて見ると、慶長《けいちやう》九年八月二十六日、又朱印を貰つてゐますが、……」
わたしは黙然《もくねん》と歩き続けた。まともに吹きつける埃風の中にW君の輕薄を憎みながら。
[# 地から 1 字上げ] (大正十一年十二月)

底本：「芥川龍之介作品集第三巻」昭和出版社
1965（昭和40）年12月20日発行

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月26日公開

2003年10月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。